第57回日本東洋医学会学術総会
教育講演・基礎漢方講座

漢方臨床における鍼灸医学： 医師が身につけておきたい経絡の理解

水嶋 丈雄

水嶋クリニック，長野，〒385-0052 佐久市大字原567-7

Clinical Kampo Medicine and Acupuncture Theory

Takeo MIZUSHIMA

Mizushima Clinic, Ooaza-Hara 567-7, Saku-si, Nagano 385-0052, Japan

Abstract

Shan Han Lun is an ancient Chinese medical book, that is written the acupoints meridian route. The acupoints meridian route is the functional connection route between acupoints Kampo medicine world in Japan has been ignored the exist of the meridian route, because the route is invisible. But if we make out the functional route of the autonomous nerve, we can understand Shan Han Lun sentence well. In addition, from a situation of acupuncture moxibustion treatment, that is important of a point of autonomous nerve. In particular, the important acupoints is the “well” point secrete adrenalin, the “spring” point secrete IFN γ , the “stream” point secrete PGE 2, et all. It is important that I understand the work to the autonomous nerve as the acupuncture treatment.

Key words : Shan Han Lun, acupoint meridian route, important acupoints, Autonomous nerve

要旨

古代中国の「傷寒論」には経絡を意識した記載がある。経絡とは経穴の機能的連絡ルートであるが、日本の漢方界では目に見えないものとして無視をしてきた。しかし、これを自律神経の作用ルートとして経絡を理解すれば「傷寒論」の条文がよく理解できる。また鍼灸治療の立場からは要穴といわれる経穴は自律神経作用点として重要な意味をもっている。「井」穴はアドレナリン分泌作用、「榮」穴は IFN γ 分泌作用「流」穴は PGE 2 分泌作用などのように、自律神経系への作用を理解することは鍼灸治療の際に重要である。

キーワード：傷寒論，経絡，重要経穴，自律神経

〈はじめに〉

私の師匠である大阪医大の兵頭正義先生は、非常に良い方でした。ちょうど私が入学したところに先生のところへ弟子入りし、学生の東洋医学研究会を作ったのですが、先生もちょうど良導絡治療という鍼灸治療を始められたところで、教授自ら鍼を打ってくれるのです。研究会に行くと、「水嶋君、肩が凝っていませんか」「ちょっと」「じゃあ」といって打ってくれるのですが、おせじにも上手とは言えないのです。教授の鍼は痛いのです。「***君、腰は痛くありませんか」「ちょっと」と言うのと打ってくれるのですが痛いのです。

どうしようもこうしようもできなくなり、教授のことだから「痛い」と言えないのです。みんなで相談して、どこも具合が悪くないことにしようといっ

て、どんなに疲れていても教授の前に行ったら、「先生、今日は元気で大丈夫です。先生の鍼がよく効きました」などと言っていたら、教授がいぶかしそうな顔をして、「そうですか。これはいけるかもしれない」と言って、「某医科大学研修医20名における鍼灸治療の効果について」などとペインクリニック学会に出すと言いだし、治癒率90%だと言いだすのです。みんな実は我慢していただけなのですが、それを抑えるのに必死だったということがあります。

〈日本の古方と傷寒論〉

まず、今日のお話で、先ほどの伊藤先生の非常に格調の高いお話もあったのですが、日本の漢方は、実は中国漢方から発祥しているのです。その中で形のないもの、目に見えないものをすべて除外して、本当に実証医学的に、つまり目に見えるものを大事

にして、患者さんのエビデンスを重要視しようというのが日本の古方だったのです。ですから、経絡の概念や気の概念はなるべく外しましょうというのが日本の漢方の基本だったのです。

ところが、気というのは、先ほどもあったように、気うつや気滞・気逆という概念がないと漢方が使えないと気剤ができてきたのですが、それでもなおかつ経絡の部分は、少し科学的根拠に乏しいのではないかということで、漢方医学の中から少し外されていた部分があります。ところが、これは宋版の『傷寒論』から持ってきたのですが、宋版の『傷寒論』にも必ず経絡の話が出てくるのです。中国は、ないものをそのまま書くことはありえないのです。

＜太陽病とその経絡＞

例えば太陽病。これは先生がたは皆さん読まれた内容になりますので、本当に簡単にご説明しますが、「太陽中風、陽浮にして陰弱。熱発汗出悪寒、鼻鳴乾嘔する者、桂枝湯これをつかさどる」。この「陽浮陰弱」が一体どういうことなのだろうか。熱が出て汗が出る、悪寒をする、これは一体どういうことだろうかというのが、『傷寒論』の解説などにも非常に詳しく書いてあります。

その次の部分に、太陽病、項背強、うなじから背中が非常にこわばって、几几、つるが首を伸ばすようにグーッとこわばってきていますよ。かえって汗で悪風する者は、桂枝加葛根湯、これをつかさどると書いてあるのです。ということは、同じ太陽病で、つまりウイルス感染初期において、生体内にウイルスが入ってくるとインターフェロン 1α が反応します。インターフェロン 1α が反応すると、TNF- α が反応し、そうするとプロスタグランジンE 2 が分泌されて視床下部に行くと、視床下部に抗ウイルスのために「発熱しなさい」と体に命令を起こしてしまうのです。それが発熱させるために筋肉をブルブルと震わせる、これが悪寒なわけです。

それがウイルス感染初期のことを言っているのですが、どうして視床下部から体全体を発熱させなさいと言っているのに、首から背中が硬いのだろうか。悪寒してプロスタグランジンから視床下部に反応して、ブルブルブルと震えるとしたら、全身震えてもいいではないか。「悪寒と悪風の違いは一体何？」という疑問が出てくるのです。

「太陽病、桂枝湯を服し、明らかに煩して治らな

い。まず、風池、風府を刺せ。その後桂枝湯を与えよ」。風池、風府はつばの名前なのです。つばの名前が『傷寒論』にドーンと出てくるのです。一体これはどこのつばなのだろう。「太陽病、病をなす。脈浮。頭項強痛。悪寒す」。頭・首から非常に張り込んでくる。どうして首なのでしょう。「太陽病。発熱汗出。悪風脈緩。名を中風となす」。いろいろあります。

いちばん下にいくと、「太陽病、頭痛、7日以上たったものは自ら癒ゆ。それは、もってその経を巡り尽くすゆえなり」。太陽病で頭痛があつて、7日以上たつて自然に治るものは、太陽病の経をグルグルグルグル病が回った結果ですよと書いてあるのです。太陽病の経とは何でしょうか。「もし再経する者は、鍼を足の太陽陽明に打て」と書いてあるのです。つまり、中国の根本は、やはり経絡という目に見えないものを基本にして書いているのです。ですから、ある程度、経絡の概念を頭に置いてこういうものを読んでいただけると、非常に『傷寒論』が分かりやすくなる。

私はいつも鍼灸師会で鍼灸の話が多いのですが、今日はドクターが多いものですから、『傷寒論』と経絡ということでお話しさせていただきます。

同じように、「太陽病、発汗後、大汗出、胃中乾、躁、不眠、よく眠れない、飲食を欲する、小便不利な者、五苓散これをつかさどる」。太陽病で、どうしておしっここのほうに、五苓散のほうに行ってしまうのでしょうか。太陽病、ウイルス感染初期でどうして五苓散がいきなり出てきてしまうのでしょうか。

「傷寒、汗出渴する者は五苓散、不渴の者は茯苓甘草湯これをつかさどる」なのです。「中風、発熱6～7日、不解で煩の者は表裏に証があり、渴して飲水を欲する者、水を入れればすぐ吐く、これを名づけて水逆という、五苓散これをつかさどる」などということがあつたのです。

先ほどは首の後ろが張り込んでくると書いてあつたのに、今度は胃腸のほうが少し乾燥する、あるいは口が渇く。水を飲んだらベーッと吐いてしまう。これはもう太陽病ですと。これは一体どういう違いがあるのでしょうかという、それが経絡に関係しているのです。

例えば、太陽膀胱経という経絡があります。これは内眼角に起こって、頭の後ろから首の後ろに出て

くるのです。グーッと背骨の後ろを通過して腰、腎臓から膀胱に一部行き、それからこの後ろのちょうど大腿から下腿の真ん中の部分をずっと通って行って、足のほうに走っていくという経絡があるんだよ。つまり、太陽膀胱経に最初にウイルス感染が起こるから、首の後ろが張り込んでくる。首の後ろが張り込んできて、グッと痛くなるということは、ウイルスがまだ内臓ではなくて太陽の経、いわゆるつぼの流れに入り込んでいる状態なのだと書いてあります。

膀胱はここにつながっているのです。これは経から臓腑の腑のほうにウイルス感染が起こってしまいましたよということ。つまり、『傷寒論』の中に経絡の概念を入れると、『傷寒論』は経の病と腑の病に分かれるのです。それを理解していただくと、先ほどのような麻黄湯、桂枝湯のグループ、五苓散のグループが太陽病で、同時に出てくるのが分かってくる。これが『傷寒論』と臓腑の関係。

＜傷寒論と経穴＞

つぼの中で、ちょっと下を飛ばしてしまったのですが、原穴、郄穴、絡穴、それから至陰、通谷、率谷、魂門、委中など、難しいつぼがあるのです。これは面白い働きをしています。

それから、ひざから下腿、後の痛みには羌活、これは山ウドですが、ウドがよく効くと。本当にそうかどうかは分かりません。清代の王叔和がいきなり言いだしたことで、本当にそうなのか分かりませんが、一応紹介だけしておきます。大防風湯や疎経活血湯はこの痛みに効いてくれますと、中国のテキストには書いてあります。果たして、そういう引経絡があるかどうかは議論の分かれるところで、一応今日は紹介だけにします。

これはつぼになるのですが、要穴というものがあり、原穴という、これは経絡反応がすべて原穴に出てきますよ。その経絡の自律神経の反応点が原穴です。これが実は良導絡治療の原則になっているのです。

中谷義雄先生という博士が、つぼの中の電位を全部調べ、それを足してつぼの数で割ったら、つぼの数の平均点と原穴の電気抵抗の値が同じだったので。ですから、原穴の値の電気抵抗を調べると、その経絡が亢ぶっているのか落ちているのか、これは自律神経の反応なのですが、それを調べることがで

きます。ですから、簡単なテスターを使って、このかたは膀胱経にウイルスが入って首が凝っていますよとか、このかたは膀胱経には反応してなくて、膀胱の腑のほうに反応していますよというのを電気抵抗で調べることができるのです。これを良導絡と申します。

これが兵頭正義先生が一生懸命やってらっしゃった形になり、一応弟子なのでこれを言っておかないといけないのですが、郄穴というものがあります。これは急性痛の反応点、つまり交感神経 α を刺激するつぼなのです。ですから、郄穴にズンと鍼を打つと、交感神経 α でグーッと下行性抑制系が働いて痛みが取れる。いわゆるトリガーポイントなどが出てくるつぼなのです。

それから、絡穴というものがあります。これは副交感神経の反応点で、鍼灸的には表裏関係を結ぶつぼであるといわれています。

それから、井穴、榮穴、兪穴、経穴、合穴というつぼがあり、井穴は心下満をつかさどる、榮穴は身熱をつかさどる、兪穴は体重節痛、経穴は喘咳寒熱、合穴は逆気・泄気、下痢ですね。それをつかさどるところとあるのですが、実はどんな働きがあるかという、井穴のグループは、ショック、プレショックに対してアドレナリンを増やしてくれる働きを持っています。榮穴は清熱作用、つまり体の熱を取ってくれる、インターフェロン γ の分泌を強くしてくれる作用を持っています。兪穴は鎮痛作用、プロスタグランジンE₂を刺激する働きを持っています。経穴は、むくみに対して循環血漿量を流してくれる働きを持っています。合穴は、自律神経調節機能がいちばん強くて、消化器疾患に対応するつぼがこういうふうに分かれているのです。これが膀胱経の井穴、胆経の井穴、あるいは少陽経の榮穴、それぞれに横に並ぶような要穴というものがあり、これをうまく使うことによって鍼灸治療はできてくるのです。

つまり、鍼灸治療というのは、この経絡の働きと要穴の意味、それがそれぞれ体にどんな働きをするのかを頭の中に置いて、その人が今起こしている状態を診断したうえで、その人がいちばん治りやすい状況に持っていくのがこれなのです。

難しいな。そうなのです。難しいから、だれでもが分かるようにするために良導絡を作ったのです。これは機械でちゃんと出てくるのです。ピッピッピ

ッピッとやると、機械でピタッと数字が出てくるのです。それはだれでも分かりますという方法だったのです。

もう一つ、各経絡のひじから下、ひざから下にある重要経穴を要穴といいます。それぞれの経には関連する臓腑の調節機能がありますが、各経に共通する自律神経作用をまとめたものが、今申しました要穴なのです。井、榮、兪、経、合。それから、ひざから下、ひじから下は、基本的に副交感神経を刺激するつぼです。

中国鍼なんて、あんなに痛いものを打って交感神経が上がらないの。上がらないのです。なぜかという、中国鍼はひざから下、ひじから下をきちんとまず最初に取るのです。これは副交感を上げるつぼなのです。もちろん、その中でも手技であるとか、穴位反応として痛みを取る刺激になるものがありますので、それは覚えておいてください。

繰り返しになりますが、太陽病というのは、その症候の特徴によって、太陽経証と太陽腑証に分かれます。太陽経証は表証で、太陽腑証は裏証なのです。裏に入った状態。「脈浮、頭項強痛して悪寒す」。つまり首の後ろ、太陽膀胱経が非常に痛いというのは、太陽経にウイルスが入っている状態を表しているのです。太陽経証が解除されなかったら、その経を巡り、巡り尽くしても治癒しなければ伝経する。どんどんどんどん経が移っていってしまいます。それで裏に侵入するのです。あるいは、発汗法が妥当でなければ、経脈から裏に伝入して、太陽腑証になってしまう場合があります。これは風邪をこじらせてしまう状態です。

〈太陽経証〉

太陽経証は、病邪の侵入部位によって太陽傷寒と太陽中風に分かれます。これは時間がないので飛ばしますが、それを現代漢方に利用すると、太陽経証は太陽中風病、「太陽中風、脈浮にして陰弱。熱発汗出悪寒、鼻鳴乾嘔する者、桂枝湯これをつかさどる」。これは陽浮にして陰弱、つまり体表面、皮膚表面のトールライクレセプターは非常に強く反応している状態なのに、それを下で補う血管リンパ系が弱い。営弱衛強などというのです。皮膚表面のトールライクレセプターは非常に反応が強くなっているのに、それを補ってくれるリンパ血管のほうが弱くなっている状態。経絡上の邪気、いわゆるウイルス

感染が盛んである一方、桂枝湯を内服しても急には発散しないで、陽気がうっ滞して非常に苦しくなってくる。つまり、首の後ろにウイルスがこもって、血液が流れなくて首がグーッと突っ張ってきますよ。そのときには太陽膀胱経の風池、風府、先ほどの首のところを鍼で軽く刺激したら、首の痛みがスッと取れます。その後、桂枝湯を内服させると取れますというのが、先ほどの『傷寒論』の意味なのです。ですから、『傷寒論』にも経絡の概念をちょっと覚えておかれると、非常に役に立つのです。

面白いことに、先ほども何度か質問が出てきましたが、漢方薬はいつやめますか、胸脇苦満が取れたら、あるいはおなかの圧痛が取れたらというのですが、鍼灸治療は即座に取れてしまうのです。瞬間に取れます。胸脇苦満がある人に鍼をポッと押すと、スッと取れてしまうのです。面白いです。ですから、鍼灸をぜひ工夫されると面白いのではないかと思います。

桂枝湯に気喘、せきが出ているときには、桂枝加厚朴杏仁湯、経脈が滞って首の後ろが痛いと言っているときには桂枝加葛根湯、桂枝湯に汗をかいたあと冷えが出てきたときには桂枝加附子湯、桂枝湯の証に誤って下してしまっ、胸の中に内患してしまったときには桂枝去芍薬湯というのが『傷寒論』に書いてあります。

太陽傷寒は太陽病、項背強几几、首の後ろがグーッと、鳥が首を伸ばすようにこわばって痛い、無感悪風、葛根湯これをつかさどる。要するに、発汗解表、麻黄湯はLエフェドリンですから、非常に強い交感刺激になりますので、発汗して治そうという、それに水毒があれば小青竜湯。ですから、小青竜湯を使う目標は水毒、心下に水音があるかどうか、それがなければ絶対使ってはいけません。麻黄湯に表寒内熱、体表面が冷えているのに中に熱がこもっているときには大青竜湯。麻黄湯で経脈の疎通、首の後ろがグーッとこわばって、鳥のようにイテテと伸ばしているのは、葛根を加えて葛根湯にしましょうと、こういうふうに来るわけです。これが経絡を念頭に置いた『傷寒論』の読み方なのです。非常に理解が簡単になってきます。

〈太陽腑証〉

太陽腑証は太陽経証から伝授されて、太陽の邪が経脈に沿って裏のほうに入ってくるのです。表証は

いつも残っていますから、脈浮、発熱汗出、膀胱の気化作用が障害されるために水気が上昇して、煩渴して水を飲みたがる。でも、胃はうまく動いていないですから、飲んだ水は吸収されないでベーッと吐いてしまう。これを水逆の証というのです。水は膀胱にたまり、正常に排泄されないのです、おしっこが出なくなる。これを膀胱五苓散の証というわけです。つまり、五苓散の証は裏なのです。これを太陽蓄水証と表現します。太陽病の経が裏に入って、膀胱に入って水がこもってしまった。これを五苓散。同じようにもう一つ、経脈に沿って裏から伝入して、血と結びついて、下焦で血液が結びついて瘀血証になってしまったときに、「煩躁、その人狂のごとし」という病態があるのです。「血自ら下る、下る者は癒ゆ」、これが桃核承気湯を使う目安なのです。

桃核承気湯。先ほど、S 状結腸部に圧痛があって、押さえるとビョーンと足をはね上げるぐらい痛いと言っていました、これを一言で言えば太陽蓄血証なのです。

「その人狂のごとし。血自ら下る」。つまり、これを飲ませれば血液が自然に下がりますから、続発性無月経などの器質性ではないもの、機能性のものの人には桃核承気湯を飲ませると月経がうまく出ますということなのです。

「太陽病不解、熱結膀胱、その人狂のごとし」「桃核承気湯によろし」。桃核承気湯は、実は太陽病のお薬なのです。

もう一つ、太陽病に小腸経というものがあります。これは小指のところにあって、手の小指から前腕、肩へ走って行って心臓へまとうという経絡です。腕骨、支正、養老、少沢、前谷、後谿、陽谷、小海などのつばがありますが、肩から腕の痛みに効くのも同じ羌活なのです。太陽膀胱経と同じ羌活。羌活の入っているものに二朮湯があるのです。二朮湯とは五十肩のお薬なのですが、肩の後ろ側のところ、つまり肩にとって前屈、あるいは外転ではなくて外旋が非常に強く制限されてきたときのお薬が二朮湯なのです。非常にこれでよく効いてくれます。

〈陽明病とその経絡〉

陽明病。これを全部やると時間がないのです。太陽病。これは先ほどと同じです。「7 日以上にわたって自ら治る者、もってその経を巡り尽くすゆえなり。もし再経欲作を起こす場合には、足の陽明に鍼を打

つと、その経を伝わらなければ、すなわち癒ゆ」。つまり、太陽病だけの経をグルグル回れば治るんだよ。それがほかの陽明や少陽と変わらなければ治るのですよ。「陽明病、不吐、不下、心煩する者、調胃承気湯、これを与えよ」。いろいろ書いてありますが、これは皆さんがたが読まれたとおりで、こんなものは初めて見るという先生は、ちょっと勉強不足ですので、またよく見ていてください。

これも同じような形で、足の陽明経というものがあり、鼻の横から口に入り、おとがい部に達し、耳の後ろ、前から前額部に達します。つまり、前額部の痛みには葛根を使えということなので、こめかみの痛い片頭痛などに葛根湯、葛根加朮附湯を使いましょうと。

それから、同じように、今度は首から、顔からのど仏に対して、鎖骨の上、それからずっと下りて行って、胃に達してすい臓、それから下に向かっておへその下をずっと下りていくと、鼠径部から足の前面を通過して脛骨の外側を下りてきます。足三里、豊隆、内庭という非常に有名なつばがここに入ります。衝陽、豊隆、梁丘、厲兌、内庭、陷谷、解谿、足三里と、それぞれどんな意味を持つのかは、また詳しく申し上げますが、この井穴がアドレナリンを増やしてくれるプレシヨックのつばです。榮穴はインターフェロン γ を増やして熱を取ってくれるグループ、兪穴はプロスタグランジン E₂ の反応にという分け方なのです。この経絡に合わせて、下肢前面が痛いときには白芷、疎経活血湯なのですが、疎経活血湯はここに効いてくれます。

陽明経証というのは、陽明経の経に病がこもっていますから、風邪が直達し、太陽病より伝搬する二つのケースがあります。顔面が赤くなって前頭部が痛い、発熱悪寒、目の痛み、鼻が乾く、これはまだ風邪が残っていますから脈が浮いています。葛根湯なのですが、葛根湯を使う症状で脈が遅くなって便秘になった場合には、裏に実が入り込んできているので、承気湯を使いなさいというのが承気湯の使い方です。

陽明腑証というのは、裏熱が非常に盛んで、津液がどんどん外へ出ますから汗が出ます。口から下が非常に乾燥して、脈は洪大になります。いわゆる陽明病の四大症状をこれで起こしてきます。これは白虎湯のほうです。承気湯と白虎湯の使い分けです。

「白虎湯，熱結んで裏にあり。表裏共に熱す。裏熱が四肢に拡散しないと，体は熱いが四肢は冷える」。熱結という言い方をしますが，「傷寒，脈滑にして厥するは，裏に熱あり」，これは白虎湯を使います。

面白いことに，呉茱萸湯というのが一つあり，陽明の中に虚寒，冷えるケースがあるのです。胃腸の底から体内に冷えを起こしてしまって，陽気が排斥されるために，しゅく然と汗が出る。大便是最初は硬く，あとは軟らかくなるケースが，陽明は熱だけではなくて冷えのグループがあるのです。呉茱萸湯は，汗が出ているのにおなか冷えているケースに使うといいと書いてあるのです。これは非常に陽明病の中で面白い条文です。

「陽明病，もし食することあたわざるは，中寒と名づく」。陽明病で冷えがあるのです。

「食穀，吐かんと欲す。陽明に属するなり。呉茱萸湯これをつかさどる」などといって，呉茱萸湯は実は陽明病の虚寒のお薬なのです。

昨年度，東洋医学会でいちばん感心しましたのが，ヘリコバクターピロリのときに，2回除菌されても除菌し切れないケースがあるのです。そのときに呉茱萸湯とプロトンポンプインヒビターを使ってらっしゃる先生がいて，よく取れるのですね。呉茱萸湯の中にEMキノロンというキニーネみたいな成分が入っているのです。そういえば，確かに昔の除菌は，イタリア式というのは，抗ウイルス剤，抗菌剤だけではなくて，抗原虫剤を使いました。フラジールみたいなもの。そういうタイプに呉茱萸湯がいいのかななど，話が全然それますが。

手の陽明，大腸経です。これは手の人さし指から起こって，腕の前腕に沿ってグーッと進みます。肩に達して，首は頸椎，下は鎖骨上窩より肺・大腸へ流れていきます。これもこういうつぼがあり，首・手の痛み，やはりこれは葛根を使うのですが，葛根湯，葛根加朮附湯，あるいは升麻を使って，升麻葛根湯というのは，大体ここの痛みに使いますよと。

升麻葛根湯の101番は，湿疹を出すという形でしか今ないのですが，実は痛み止めにも使えます。陽明大腸経の痛み止め。陽明経で冷えがあるケースは呉茱萸湯を使うケースなのです。

〈少陽病とその経絡〉

「少陽病，傷寒5～6日，中風，往来寒熱，胸脇苦満，飲食を欲せず，心煩喜嘔する者，小柴胡湯こ

れをつかさどる」。これは有名なところですよ。

ここにつぼがあるのですが，「傷寒，腹満，譫語」，うわごとのようにぶつぶつ言って，寸口の脈が非常に浮いて硬い，これは肝が脾に乗ってしまって，これを乗と名づける。これは期門を打てと書いてある。期門というつぼがあるのです。

少陽胆経とはどこにあるかというと，目の外眼角から起こって，上に向かって前額部，それから耳の後ろを通る。ここは少陽胆経ということは，柴胡剤を使えという目安なのです。ですから，片頭痛のこの部分は柴胡，抑肝散や加味逍遙散，あるいは連翹の入った清上防風湯などでここの痛みはよく取れるお薬になるのです。少陽経の痛み，柴胡，連翹という……。

いや，おかしい，薬がそんなところに持っていくわけがないという議論はあるので，それはまたあとで詳しく申し上げますが，一応あるという前提でお話ししています。

肩から大椎に向かって左右が交差，前方に向かって，今度は胸の横から股関節，大腿の外側，腓骨前面から外果の前面，第4指に入っていきます。足の外側痛も独活が効くのです。防風が効くのです。独活寄生湯，あるいは防風通聖散あたりがここの痛みを取ってくれるグループです。

少陽経証。太陽は表と陽明は裏，少陽はその真ん中になりますから，半表半裏といいます。それぞれ表裏に連結しているため，「少陽は枢なり」という全身のかなめのようなつなぎ目をしています。ですから，「難病は少陽にこもる」という言い方をするわけです。難病というと少陽病と必ず出てくるのです。寺澤先生も大好きな「難病は少陽病」と来るのですが，少陽経証は邪，少陽経と両脇に集まって，邪正間の争いは表裏の間で起こるので，往来寒熱，胸脇苦満，口腔・咽頭部の乾き，目眩が起こるのです。「少陽の病たり，口苦き，のど乾き，目眩なり」。

熱入血室は少陽病のところに出てきます。女性が生理のときに風邪を引くと，血質に邪が結んで，非常に強い風邪症状，鬼を見るごときという症状を起こすという，これは非常に有名な条文ですから，ついでに覚えておいてください。こういうときには小柴胡湯と承気湯を一緒に使います。

手の少陽三焦経。薬指に起こって，指からずっとこちらのほうへ起こってきます。これは耳をまとう

ので、耳の病気によく使います。連翹などを使います。清上防風湯、耳の炎症に使うことが多くございます。荊防敗毒散などを使います。

〈太陰病とその経絡〉

太陰病。「太陰の病、腹満而吐、食が下らず、自利ますます甚だし、時に腹が自ら痛み。もしこれを下せば、必ず胸下結鞭す」。太陰の病は食べられないのです。食べてどんどん下痢がひどくなって、おなか痛くなって、それを無理やり下してしまったら、おなかの中でグーッと詰まってしまうというのが太陰病なのです。こんなものに経証と腑証があるのでしょうか。そういうことになってきます。

太陰脾経は足の親指からグーッと入り、おなかを通して脾・胃をまとい、横隔膜から胸のかたわりから舌に参ります。ここは蒼朮が非常によく効いてくれますので、越婢加朮湯、抑肝散、あるいは芍薬を使って、この辺は芍薬甘草湯で痛みを取ることができます。

手の太陰肺経は、親指のところからグーッと上がって、尺沢、孔最、列缺、太淵などのつぼがありますが、これは升麻という薬が非常によく効きます。あるいは白芷、清上防風湯や内托散を使えというグループです。

太陰病は、太陰脾経の虚寒証を呈しますので、太陽病の伝経や直中で起こります。脾の陽がうまく伸びないための温火失調、ですから冷えてくるのです。「腹満して時に痛む、食下らず、嘔吐下痢」、これは人參湯のグループになります。太陽病を下して、邪が内患して腹満して非常に痛い、これは桂枝加芍薬湯。太陽中風のほうは、手足が痛み脈が浮いているから桂枝となります。太陰病で経腑共に病、俱病は、臓に寒あれば下痢腹満、経に寒あれば肢体疼痛、最初に四逆湯を使ってから、あとに桂枝湯を使えというのが、太陽病の経証と腑証の使い方になります。

〈少陰病とその経絡〉

少陰病です。「少陰の病は、脈細にして、ただ寝んと欲す」。ちょうど今の食事のあとの皆さんの状況なのですが、私も一杯飲んできたので、かなり眠くなってきてしまいましたが、「少陰病始めこれを得、発熱、脈を沈む者、麻黄附子細辛湯これをつかさどる」。「少陰病、二三日以上、心中煩、横になれない」、「黄連阿膠湯これをつかさどる」。

いろいろありますが、これも全部先生がたは読ん

でらっしゃるグループになります。これも実は経証と腑証があるのです。陰経は腑証ではなくて臓証になりますが、足の少陰腎経は足の小指から起こって、内果の後方を通して、きびすから足の内側を通して腎臓へ行って、おなかを上ってのどに行くのです。ですから、『傷寒論』でどのお薬は少陰病に入っているのです。桔梗湯、甘草湯はこれから来ているのです。桔梗湯、甘草湯は少陰病で出てくるのは、のどに少陰の病が来るからなのです。

少陰の病は心の病と腎の病なのですが、痛みに関しては沢瀉が効きますから、八味地黄丸、あるいは独活寄生湯などがここの痛みにも効くといわれています。

少陰病は心腎の病気のことで、少陰と太陽は表裏関係にありますから、太陽病からいきなりボンと移ってしまう、あるいは直接来るもの、治療を間違えたものなどがあります。

寒邪が少陰に侵入、かえって発熱脈が沈んで太陽が残存している状態、太陽、少陰共に病気になっている場合には麻黄附子細辛湯。太陽病で汗が出すぎて腎陽がうまく伸びない、これは少陰病で真武湯。少陰病で下痢、脈が沈んでいる、寒邪がおなかに直接入ってしまった、これは白通湯なのですが、少陰病で腎水が足りなくなった、これは陰虛火旺で黄連阿膠湯。少陰病の蓄水病、これは臓腑のほうになりますが猪苓湯。少陰の陽虚、冷えが強いものには四逆湯。小便不利で陽気が非常に抑えられて冷えになった場合には四逆散。少陰経脈はのどを回りますから、甘草湯、桔梗湯は少陰病に出てきますよという、これがやはり『傷寒論』に経絡が少し関与しているということになります。神経も手の小指からグーッと入り、わき腹を通して心臓に入ってくる。手の前腕内側痛には細辛が効くので、麻黄附子細辛湯がここによく効くといわれています。

つばを全部説明すると、とてもではないが時間が足りないのです、またこれは鍼灸に興味のある先生だけにご説明したいと思います。

〈厥陰病とその経絡〉

厥陰病。「厥陰の病をなすは、消渴、気上り心を突く」。心がドーン、ドーンと突かれているような状態。心中が熱を持って、渴いて食べられない。食を食べれば思わず虫をグーッと吐いてしまう。徳川家康がそうだったそうです。これを下せば下痢が止

まらないと書いてある。これが厥陰病です。

厥陰中風というものもあります。傷寒の脈が非常に弱くて、厥、7～8日たって皮膚が冷えてきた状態ですね。これは厥陰病で、やはりこれは虫を吐く場合と吐かない場合があるという説明なのですが、虫が膈に入ってきた場合には、食べるとまたゲーッと吐いてしまうのだが、その人が常に虫を吐いている場合には、蛔厥者と言って烏梅丸を使えと書いてあるのです。あまり最近使うことはありません。一人だけ、機能性胃腸症で非常に強い反応性の胃痛のときに、これがよく効いたケースがありました。

「手足の厥寒、脈が細にして絶えんと欲す、当帰四逆湯」。当帰四逆湯は厥陰病に入ってくるわけですね。「乾嘔吐涎沫、頭痛者、呉茱萸湯これをつかさどる」。これも厥陰病に入ってくるということです。

足の厥陰肝経は、足の親指から内果を通してゲーッと上がっていき、生殖器をまとい、上に向かって肝に属し、胸脇部からのどの後ろ、目に達すると。足の内側痛、ここには呉茱萸がよく効くのです。ですから、当帰四逆湯に呉茱萸を加えることによって、当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、足の内側の冷え、痛みに効くようになっているのです。そのために呉茱萸が入っているのです。三陰交、太衝、蠡溝といわれます。

厥陰の寒証は手足の冷えと下痢、厥陰熱証は口渴と嘔吐、発熱、ほとんど一緒になっていることが多いのですが、厥陰は寒病、これは冷えに影響して、吐いたりえづいたり下痢をしたりします。虫を吐く場合には烏梅丸、厥陰肝経は胃を挟んで肝に属すために、下焦の濁飲が経に沿って胃を冒すために、乾嘔吐涎沫、頭に達すると頭痛になって呉茱萸湯を使うケースがあります。肝は造血作用があるので、血虚に寒邪を受けると、寒が肝脈に滞るための当帰四逆湯を使うケースがあるということです。

あっという間に六経全部やってしまいましたが、それぞれに経の病の場合、それから腑に滞っている場合、あるいは臓に来ている場合、実はそれはもともと『傷寒論』の中に含まれているのです。もちろん、根拠のないものとボンと削ってしまうのは簡単なのですが、一応頭にそれを置いて読んでいただくと、『傷寒論』の条文が大変分かりやすくなってくる、理解しやすくなってくる、薬が使いやすくなりますということで、『傷寒論』の経絡の話をし

ました。

手の厥陰心包経、これは中指からゲーッと入り、手の中央部から中指に入っていきます。上腕、前腕の内側痛、これは柴胡が効きますので、四逆散を使ったりします。

〈奇経とその経絡〉

その他、十二正経、今12個やったのですが、膈が詰まっているとき、なぜ膈が詰まるかは江部洋一郎先生の本を読んでいただければよろしいです。通膈湯というお薬がありますが、正常のルートが流れないケースがあります。そうすると、そこにバイパスができてしまうのです。それを奇経というのです。任脈、督脈、陰維脈、陽維脈、陰蹻脈、陽蹻脈、帶脈、衝脈。鍼灸の先生がたは、これをいかに上手に使うかによって、その腕を競っているのです。

ですから、鍼灸の先生がたは、なるべく少ない刺激で、弱い刺激で、副交感をいかに持ち上げて、交感神経も一緒に持ち上げることができるか。つまり、「どこが痛いですか」、ブスッ、これは医者のがうまいのです。鍼灸の先生がたがいちばん得意なのは、実はここなのです。ですから、それぞれの経絡、あるいはそれぞれの奇経、それが今どんな状況にあって、その人がどういう治療を望んでいるか。それによって鍼をやってあげると、先ほど申しました胸脇苦満や臍下不仁がスパッと取れるのです。一瞬で取れるのです。漢方の先生がたは「そんなばかな」とおっしゃるのですが、本当に取れてしまうのです。もちろん、元に戻りますから、大体2週間ぐらいで取れていきますので、何週間か続けてやらないといけないのですが、それと同時に漢方を使うと非常に効果がよくなってきます。

督脈は背中の中です。百会という有名なつぼがあります。最初に出た風府はこの経穴なのです。身中の虫とか獅子身中などといいますが、命門は命の門といって、命門が尽きると命がなくなってしまうというのです。ここのこわばりに関しては鹿茸、鹿の角ですね。黄連などを使います。黄連解毒湯は腰背部のこわばり、不妊などに使うケースがあります。非常に背中のこわばりが強いケースという形です。

それから、任脈は真ん中です。任脈も督脈も横隔膜が詰まっているときなのです。胸脇苦満、心下痞があって、非常にウツと詰まって生気が流れないと

きに、こういうバイパスを通ってしまうのです。そのときに、こういうところがどうなっているか、つまり今、中脘、関元、中極というつぼを探すのです。そこに反応が出ていないかどうか。

おりもの、月経困難、小便不利などのときに、阿膠、黄柏などが任脈に効きますから芎帰膠艾湯。芎帰膠艾湯も止血剤と書いてありますが、実は四物湯の加減方なのです。四物湯に阿膠と艾葉が加わっていますから、非常に生理痛にもよく効きますし楽になりますから、ぜひこれをお試しになっていただき、もっと使っていただいていいのではないかと考えています。今日は婦人療法はお話できないのですが、芎帰膠艾湯、四物湯の加減方として使うと、大変いろいろな疾患に役に立ちます。

〈鍼灸治療の原則〉

最後になりますが、鍼灸治療の実際。鍼灸治療には、副交感神経を刺激する方法と交感神経を刺激する方法があります。副交感神経を刺激すると、基本的にはひじから下、ひざから下のつぼを弁証で選択するのです。そのかたが今どこに病気があるのかをしっかりと刺激して、分からないかたは良導絡でトントントンと電気抵抗を調べていただいてもけっこうです。

副交感神経を刺激するには、皮膚から4 mmまでの浅刺しなのです。それ以上入ると副交感にならないのです。呼吸に合わせてながら、やや早い捻転補法でタタタと刺激を与えると副交感神経がグーッと上がってきます。

副交感神経が上がってきたら、今度は痛みの疾患においてはトリガーポイントを探して、筋膜から筋層にちょっと深い鍼をして、ゆっくり捻転方法をすると下行性抑制系が働いて痛みがスッと取れるのです。鍼灸師会でも口を酸っぱくしてあちこちで言っているのは、決して交感神経の刺激だけはしてはいけません。どこが痛いですか、ここですか、ブスッとやると、そのときの痛みは取れるのですが、必ずリバウンドを起こすのです。こういう鍼だけは絶対やってはいけない。昔からいわれる阿是穴治療家になってはいけないというのは、そういう意味なのですが、副交感を持ち上げてから交感神経α受

容体を持ち上げることによって、永続的にいい鎮痛効果、つまり体がいちばん治りやすい状況を作ることができるのです。

これは私どものスタッフです。こうやって脈を診てどうするかを判断します。これは27ゲージの注射針で、鍼灸鍼はこんなものなのです。一応、ここに管がついているのです。この管の上にちょっと飛び出した部分があって、この上をトントんとたたくと4 mmが入るのです。皮膚に4 mm入るようになっています。

こうやって、どのつぼがいちばんいいのかな。この人はちょっとプレショックになっているから、アドレナリンを上げないといけないかな。この人は、ちょっと今痛みが強くなっているから、プロスタグランジンを持ち上げないといけないかな。この人は、ちょっとインターフェロンγで熱を取らないといけないかなというのを調べながら、この場合には胃腸が非常に弱くなっていたので、胃腸のつぼの太白というところに鍼を置き、そうすると鍼管の上に少し飛び出したところが出るのです。それを指でトントんとたたきただけなのです。

トントんとたたいて、管をポッと抜きます。こんなものです。皮膚に4 mmだけブランブランしているような状態。これで十分なのです。これで副交感神経を持ち上げてくれるのです。本当にこんなものです。これはパランと垂れてしまうのです。そのぐらゐの刺激、これが鍼灸の副交感神経を持ち上げる刺激。もちろん、良導絡治療でもこういう刺激なのです。

これだけで痛みは取れません。痛みが取れるテクニックがあるのですが、それはちょっと難しくなるので、痛みが取れない場合には、筋層まで少し深めに入れて刺激をして交感神経α受容体をする、副交感と交感が同時に持ち上がってくるので、非常に生体が楽になりますというのが鍼灸治療の原則です。

ということで、時間がなかったので飛ばしましたが、今日は『傷寒論』と経絡の関係、それと鍼灸治療を実際にどうやってやるかというお話をさせていただきました。